2024年4月28日

説教題「神の国の『門』」ヨハネによる福音書10章7～18節

主任牧師　加藤　誠

「わたしは門である。わたしを通って入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。」（ヨハネ福音書10章9節）

主イエスの時代、羊たちは複数の羊飼いたちが共同で管理する石垣の囲いの中で夜を過ごしたそうです。夕方になると、羊飼いたちはそれぞれ自分の羊を石垣の中に導き入れます。石垣の囲いには「門」と呼ばれる入口があり、その「門」を羊飼いが交代で番をしたので、羊たちは野獣の危険から守られて、安心して疲れた体を休めることができました。そして朝になるとそれぞれの羊飼いが自分の羊の名を呼んで連れ出します。羊飼いは、自分の羊一匹一匹の特徴を良く知っていて、その名を間違うことはありませんでした。一方、羊たちも自分の羊飼いの声を良く知っていたので、間違って従うことはなかったそうです。羊たちは自分の名を呼ぶ羊飼いに導かれて石垣の囲いを出て、牧草のある場所や池のほとりに連れていってもらいました。

つまり「門」は、夜になると安心して身を横たえることのできる場所の「入口」であると同時に、朝にはその日の食物と水を得るために出かけていく「出口」でした。羊飼いが守ってくれる「門」を出入りすることで、羊は日々その命を豊かに生きることができたのです。

羊は弱い動物です。一匹だけでは生きていけません。羊の目は横に細長く、約300度、ほぼ自分の後ろまでをカバーできるそうですが、奥行きを認識するのが苦手で、誰かのあとをついていかないと恐がるのだそうです。その分、耳は良くて、自分の命を守り、養ってくれる羊飼いの声を間違うことはありません。以前、北海道の利尻島の羊たちの様子をテレビ番組で見たことがありますが、テレビ局の人が試しに羊たちを呼んでも、羊はピクリともしません。逆に羊飼いがひと言叫ぶと、どんなに遠くにいても羊たちは羊飼いめがけて集まってきました。それは見事なものでした。

羊が一匹で夜を過ごせないように、私たちもまた一人だけでは夜を過ごすことができない者ではないでしょうか。夜は心の中に湧きおこってくる不安や恐れに押しつぶされそうになる時です。あるいは自らの過去の罪過にさいなまれる時でもあります。先日、今から30年前の4月に起こったルワンダの大虐殺を伝える報道番組で、小さな子どもたちを手にかけてしまった若者が自らの罪を語る場面がありました。虐殺に加わることを避けていた彼でしたが、村の人たちに囲まれて、子どもたちに手をかけなければ、お前の命を奪うと脅されたそうです。夜になると、その時のことが思い起こされて、地獄のような時を過ごしてきたと語っていました。そのように、不安や恐れ、罪過にさいなまれる夜を私たちは一人で過ごすことができません。

そのような私たちに神さまは「恐れるな。わたしがあなたと共にいる」と語りかけてくださいます。イエス・キリストが「あなたの償いきれない罪をわたしが十字架で引き受け、その罪が生み出す悲しみと苦しみを十字架で引き受けて、わたしはあなたと共にいる。だから、あなたの十字架を下ろして、ここで休みなさい」と語りかけてくださり、神さまの愛のもとに重荷を下ろして休むことができるように招き入れ、新しく生き直しす道に導いてくださいます。

また羊たちが自分の力だけでは食物と水を見つけられないように、私たちもまた日々の課題に向かう力を必要とする弱い存在です。その日一日を生きる愛と勇気と希望、励ましを必要としています。周りの人の小さなひと言に私たちは傷つき、わたしの貧しい愛はあっという間に枯れてしまいます。また私たちは自分の力では「神の国に向かう道」を歩めない者です。大井教会は聖書日課で先週から「箴言」を一日一章読んでいますけれども、その 6 章 14 節には「戒めは灯、教えは光、懲らしめや諭しは命の道」という言葉があります。私たち人間は実に誘惑に弱い存在です。箴言は今から二千五百年以上も前の言葉ですが、今の私たちにも「なるほど」と共感できたり、心にちくりと刺さる言葉が結構あります（時代的な限界があって「今やこれはもう違う」という言葉もありますが）。昔に比べたら、車があり、飛行機があり、さまざまな電化製品に囲まれて、私たちの暮らしは激変しましたけれども、人間そのものの姿は何も変わっていません。スマホを手にすれば幸せになれるか。なれません。ちょっと調子が良いことが続くとすぐに勘違いをして傲慢になり足を踏み外す。そして誘惑の罠に足を滑らすと、あっという間に破滅の道に引きずり込まれていく。そのような弱さと愚かさを抱えたままの私たちは、自分に向けてまっすぐに真実の道を語りかけてくれる声を必要としているのです。「それは違う！」と両手を広げて「戒めと教えと懲らしめ」をもって、間違った道に行こうとするわたしを命の道に連れ戻してくれる羊飼いを必要としているのです。そう言う意味で、私たちは優しい愛の言葉だけでなく、愛ある厳しい言葉も必要としています。

「わたしは門である。わたしを通って入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける」（9 節）。主イエスは私たちを「神の国の命と平和、希望」に導くために来てくださった「門」です。「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」（10 節）。「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」（11 節）。「わたしは門である」と、責任をもって私たちの命を守ってくださる方は「良い羊飼い」として、御自分の命を捨ててでも私たちを永遠の命、喜びと安らぎの道に導いてくださる方です。日々、真実の愛をもってわたしの名を呼んでくださる方の語りかけを、わたしも日々求めて、命を豊かにいただいていきたいのです。